

JIM-NET 便り

2014年3月20日(木)

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746



NEWS

- 10年目を迎えるJIM-NET..... P.1
- 希望の足..... P.2
- ～アルビル現地報告～
イマーンちゃん笑顔ふたたび P.3
- ～現地報告～ シリア難民妊産婦支援.... P.4
- 「福島市民放射能測定所ダイレクトリー」完成
..... P.5
- 愛のあるカカオをパプアから..... P.6
- 第9回チョコ募金が終わって..... P.7
- 鎌田代表のつぶやき..... P.8上
- JIM-NET新スタッフよりご挨拶
カカオクッキーのご紹介..... P.8下

10年目を迎える JIM-NET

佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

JIM-NETは、2014年6月をもちまして設立10年になります。先日2月14日から19日までギャラリー日比谷で、「絆ぐるぐる」展を開催し10年を振り返りました。そしてアルビルでは、2月20日と21日に、日本とイラクの医師たちが集まるJIM-NET会議を開催。10年にわたる医療支援の成果を振り返りました。それをもとに評価を実施し、今後のプランを作る予定です。2014年は、10周年のイベントをいくつか企画していきたいと思えます。まさに、今まで築きあげた絆がぐるぐると再構築される、そんな一年にしたいと思っています。

JIM-NETのリーフレットの表紙には少女ラナの写真が使われています。ラナ・サポーターは、彼女の名前から来ています。イラク戦争直前の2003年1月29日に、私がバグダッドの子ども福祉病院(当時はマンスール病院)で出会いました。絵をかいてくれと頼むとカニューラ(薬などを投入するために体内にさしこむ管)が刺さった腕を気にせず、鉛筆を握りしめて絵をかいてくれました。彼女の自画像は、日本の女の子と手をつないでいます。この絵は強い平和のメッセージとなりました。「戦争が始まったら、真っ先に死んでしまうのは、点滴を受けている子どもたちだ。戦争ではなくて薬の支援が必要だ」と訴えました。

しかし、ブッシュ大統領は同じ日に「われわれは、米軍の力を結集して戦い、そして勝利する。米国と同盟国は、イラクの人々に食糧や医薬品などの救援物資、そして自由をもたらす。イラクを民主化」と宣言し、戦争を始めて

しまったのです。ラナちゃんのところには薬は届かず、戦争が始まる前に亡くなってしまいました。

半年後、英語が話せる彼女のおばさんに言われました。「あの時薬があったら助かっていたのに」。イラク開戦後に薬の支援を始めた僕らに、「遅すぎます！」と声を荒げました。そのおばさんの声が耳にはなれず、JIM-NETを作るきっかけになりました。

先日、なんとそのおばさんからメールが届きましたので紹介します。

「ラナ・ジャマルは、2003年に12歳でがんに苦しんでなくなりました。彼女は学校でもとても美しく、賢い子でした。彼女は絵をかくのが大好きでした。いくつもの賞をもらっていました。おとぎ話が大好きで、小さい時から一人で読むことが出来ました。先生はみんな、彼女の素行をほめていましたし、クラスでも評判でした。がんになってからはリカー先生に診てもらっていました。リカー先生が、彼女ががんであることを診断しました。彼女は医師として最善を尽くしてくれて、ラナをバグダッドに送ったのです。そこでは、善良な医師たちに出会えました。ラナの家族たちは、何とか生かそうと必死でした。しかし残念なことに、6か月苦しんだあげく亡くなりました。叔母の私は、彼女の辛い病気の旅の後に、平安がありますよう神に祈ります。

シャーサ・サビーハ」

(写真右上) JIM-NETのリーフレット表紙

(写真左上) ラナの写真を持つリカ主治医(2014年2月21日JIM-NET会議で)

希望の足

佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

シリア難民のイマッドさんはヨルダンの国境ラムサに住んでいる。目の前が国境で、耳を澄ませばバシーン、バシーンと爆発音が聞こえてくるし、煙が上がるのも見える。国境は閉じられているが、けが人だけは国境を越えてくるので、イマッドさんは、ポンコツのバンを借りてボランティアで患者を病院やリハビリセンターなどに送り届けている。そこでJIM-NETは、毎月500ドルを支払って、ガソリン代や車のメンテ代にしてもらっている。うち100ドルはイマッドさんの経費だ。もちろんそんなのでたりるはずはない。シリア難民に群がる援助ビジネスも盛んで、NGOで雇ってもらったら1000ドル位は稼げるだけに、イマッドさんはお金のことなど気にしない。

その日はわけがあってサファウィという町で待ち合わせをしたのだが、僕の方がいろいろ時間かかってしまってすっかり彼を待たしてしまった。彼の車は窓がちゃんと閉まらないのでともかく寒い。そして、止まるたびにエンジンがかからなくなる。ブースターの接触が悪いのかトンカチであちこち叩いているうちにエンジンがかかる。そういうのを3回繰り返してようやくイルビッドのリハビリセンターに到着した。ここはシリア人たちが自分らでお金を集めてやりくりしている。イマッドさんは張り切って、ミルクとジュースを買ってみんなに配るといふ。車椅子で何人かが集まってきた。ナガムさんという女性は16歳。一年前に結婚した。夫のムハンマドさんは20歳で、ダラーで農業をやっていた。ミサイル弾が飛んできて彼女の右足は吹っ飛んでしまった。その時おなかの中に7か月の赤

ちゃんがいたが、崩れ落ちた瓦礫がおなかにあたって、流産してしまった
そうだ。そんな状況だとすっかりふさぎ込んでしまうのだが、夫婦そろって笑顔が絶えない。別にミルクをもらったから大喜びというわけではない

のだろう。「どうして、そんなに前向きになれるの？」って聞いてみた。「ここでは、足がないからって特別なことではないんです。ごく当たり前のこと。みんなが助け合っている。神が決めたことだから」とムハンマドさんが言う。

12歳のムスタファ君。

2か月前に、クリーニング屋の前に座っていたらロケット弾が飛んできた。一発飛んできたのでみんな逃げたが、2発目にあたってしまった。その場で、右手、右足がもげてしまった。

徴兵されるのを恐れ、先に逃げてきた19歳のお兄さんが面倒を見ている。兄は、「ムスタファが怪我したときの動画を見るか？」と聞いてきた。携帯電話の中に入っているというのだ。さすがに本人のいる前で見れないと断るが「ムスタファは何度も見ているから大丈夫だ」といふ。その映像では血まみれのムスタファ君がベッドに横たわり、右足はぐちゃぐちゃにつぶれていた。右腕を誰かが持ち上げると、皮一枚でぶら下がっていて、それをねじり切ろうとしている。ムスタファ君は意識があり、起き上がろうとするが、周りから抑えられる。そして悶絶。このおぞましい映像をムスタファ君本人が何度も見続けている。それでもトラウマを抱えているようには見えなかった。名前を書いてもらうが、利き腕を失ったので上手く字が書けない。それだけではない。「しばらく学校に行っていないから忘れちゃった」と笑っている。

将来の夢
ってあるの
かなって聞
いたら、と
もかく早く
勉強したい
という。ム
スタファ君
は、とても
強い子だ。
文句ひとつ
言わずに微
笑んでくれ
る。和平交
渉は遅々として進ま
ないが、一日
も早く停戦
してほしい。



足を切断したナガムさん



手足を失った12歳のムスタファ君

～現地報告～ シリア難民妊産婦支援

榎本彰子（海外プロジェクト担当）

2012年から皆さんのご寄附で開始したシリア難民妊産婦支援。シリア内戦の激化と難民の増加に伴い、これまでの支援を踏まえ、外務省のNGO連携無償資金援助とつなげ、今年1月からイラクのアルビルにある難民キャンプでのシリア難民妊産婦支援を実施しています。

●これまでの支援

ヨルダンでは、シリアのNGO、SRDが運営するクリニックで231名のシリア難民の出産費を補助しました（2013年1月～3月）。その後ヨルダンでは、国際的な支援も入っていることから妊産婦支援は終了し、イラクのアルビルでの活動に集中しました。「10人の妊婦さん」プロジェクト（最終的には14名）と称し、アルビルの都市難民の妊婦10人に対して、検診の交通費・医療費をサポートしながら、現状調査を行いました。

その結果、妊産婦の置かれている状況の厳しさが分かりました。イラクに逃れてきてから、一度も検診に行っていない妊産婦さんが多くいました。病院やクリニックに関する情報が得にくかったり、受診費用や交通費が支払えなかったりと原因は様々でした。さらに難民の状況は変化していきました。アルビルに逃れてきた難民の大多数は、都市難民として家を借りて暮らしていましたが、アルビルに4つの新しいキャンプができたことで、多くの難民がキャンプに移ることになりました。そのうちのダラシャクラン・キャンプは周辺に何もなく、都市まで車で約1時間かかり、緊急の場合以外の病院へのアクセスがほとんどない状況でした。そのためJIM-NETは、医療機関へのアクセス向上、健診のための機材の供与、母子保健に関する情報提供、母子保健のための栄養補助食品の配布、そして日本からの専門家派遣の実施を決定し、シリア難民の母子保健の向上を目指した支援をすることになりました。



キャンプ内で妊産婦さんへの聞き取り(写真左 榎本)

●医療バスの運行を開始

シリア難民妊産婦支援プロジェクトにおける一つ目の活動は、妊婦さんが医療機関へアクセスできるように、キャンプから公立産科病院まで医療バスを配備することです。2014年2月から、バスの運行が開始しました。第一弾のバスには、早急に妊婦健診が



公立産科病院に到着した医療バス

必要な10人の妊婦さんが乗り込みました。公立病院は混雑しており、なかなかスムーズには検診できませんでしたが、最後には検診に来られてよかったという声がありました。また、閉鎖的なキャンプから出て病院に来ることで、気分転換にもなったようです。

●検診・出産に必要な機材を提供

公立病院も当初の予定より、はるかに多くの妊産婦さんを受け入れることになり、全体的なサービスの低下が起き始めています。例えば、定期健診用の超音波検診機も一台しかないの、シリア難民が増えることで、検査の待ち時間がかかり健診時間が短くなります。そのため、公立病院に超音波検査機器とCTG(胎児心拍陣痛図)を供与し、健診の効率化を図ります。

●今後の活動は、リプロダクティブヘルスに配慮し、母子手帳の作成や物資の配布

妊産婦への母子保健に関するパンフレットを作成・配布し、定期的・継続的な検診の動機に繋がりたいと考えています。また、日本から妊産婦支援の専門家を派遣し、難民キャンプで妊婦を対象としたセミナーを実施する予定です。今後も、都度の状況に沿った緊急支援を実施し、シリア難民の妊婦さんが安心してお産に臨めるようサポートしていきたいと思ひます。

リプロダクティブヘルス(『性と生殖に関する健康・権利』)とはー1994年、エジプトのカイロで開かれた国際人口開発会議(ICPD)にて提唱された概念。人間の生殖システムおよびその機能と活動過程のすべての側面において、単に疾病、障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを指します。



健診の様子



母子保健に関するパンフレットを作成中

「福島市民放射能測定所ダイレクトリー」完成

村田信一（JIM-NET 福島プロジェクト担当）



昨年秋から懸念材料だったことの一つが、福島放射能測定所のダイレクトリーをはやく完成させなければ、ということだった。

私自身は、JIM-NETに関わるからには、福島の人たちのために少しでもいいからプラスになることをやりたいと思い続けていたが、何よりもまず市民放射能測定所のデータをまとめて、福島に暮らす人々に役立ててもらえたら、それは大いに意義があることでもある、ということで、私は多くの時間をこのダイレクトリーの作成の為に割くこととなった。

当初は、簡単にできることだと考えていたのだが、始めて見ると実に大変な作業であった。単にデータを集めるということであればまだ簡単だったのだが、まずデータが集まらない。ひとつには、各測定所も忙しいということもあり、またそれぞれの測定所がボランティアでやっているケースが多いこともあり、ダイレクトリーの為にデータをまとめたり、原稿を書くことがままならなかったこともあるだろう。しかしそれ以上に、ダイレクトリーをつくと伝えてから、実際に動き始めるまでに時間がかかりすぎたということも原因だと思う。

福島の現状は、決して楽観できない状況であることは、多くの人が認識していることだと私は思うが、だからこそ日々生きていくことが非常に大変なことでもあり、ダイレクトリーを作ることの意義が伝わりにくい面もあったのではないかと、少なからず反省する面もある。

何度も各測定所にメールや電話で連絡を取り、こちらの意志を伝えたのだが、いくつかの測定所は、最後まで連絡がつかなかった。また、連絡がついた測定所でも、時間的な遅れに関してクレームをつけられたところもある。また、メールでのやりとり慣れていない方々も少なくなく、その点でもスムーズに事が運ばなかったところもある。

最終的には、私が各測定所に足を運び、説明し、いくつかの測定所ではその場で私がデータを書き込んだりもしたが、そのくらいは私たちがやってもいいことではないのかと、私自身が判断したからやったことであり、結果的に非常に協力的にデータ提供していただき、また快く受け入れていただけたことが、最終的な完成へと大きく動くことに繋がったと思っている。

また、JIM-NETのスタッフたちのさまざまな協力もあり、昨年11月末までにはほぼ原稿も集まり、またご協力いただいた編集の方々にも、迅速に作業していただいたおかげで、12月中には完成原稿がすべて集

まり、新しい年のスタートと共に、「福島市民放射能測定所ダイレクトリー」としてまとめることが出来た。そして1月30日には、資金面も含めてサポートしていただいた日本ルーテル教団の一室をお借りして、完成お披露目を催すことも出来たことは、ほんとうに大きな喜びであり、また微々たるものかもしれないけれど、少しでも福島の人たちのためになるかと思えば、何ヶ月かの苦勞も報われるというものだ。また、お披露目会では、東京に暮らす人たちにこのダイレクトリーを手にとってもらえたことも、大いに意義深いものだったと思う。放射能災害は、起きた場所は福島だったかもしれないが、その影響を及ぼすエリアは広く関東にも広がっていて、また私たちの暮らしがもたらした災害でもあるからだ。

3年が経ち、ますます福島の記憶は多くの日本人の脳裏から薄れていっているのではと危惧するが、実際のところほんとうの問題はこれからだと私は思っている。単に原子力発電所が事故を起こして、近隣の街や村が汚染されました。人々が避難しました。農産物が汚染しました。でも、もう大丈夫です。なんていう簡単なことではないのだ。何も解決していないし、人々の健康被害もこれから顕在化してくるだろうと大いに予測できるのだから、私たち日本人が、常に意識して、自分たちの生き方をも変えていく切っ掛けにしなければならぬと思う。

そういうことも含めて、その切っ掛けとしてのダイレクトリーだったのだと、私は思っている。そして、3年前に起きたことを忘却の彼方へと置き去りにして、何事もなかったかのように経済優先の社会が復活しつつあるが、それは新たな事故、悲劇に繋がる道でもある。

— 私たちが、起きたことをしっかりと胸に刻んで、それをつねに意識して生きていくために— ダイレクトリーがその小さなスタートになってくれたら。

そんなささやかな願いを胸に秘めながら、これからも福島のことに関わり続けていきたいと思う。



このダイレクトリーは、福島県の各測定所のほか、JIM-NETのHP (http://www.jim-net.net/aboutus/fuku_dir/index.php) などでご覧になれます。

「福島市民放射能測定所ダイレクトリー」

愛のあるカカオをパプアから

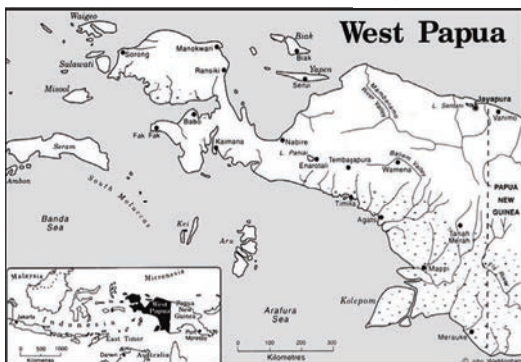
吉澤真満子(特定非営利活動法人APLA事務局長)

「好きなお菓子は？」と聞かれて、「チョコレート！」と答える方も多いのではないのでしょうか。今や日本の私たちにとって当たり前の存在であるチョコレートですが、「誰がどのように作ったかを知っていますか？」と聞かれて答えられる人は少ないはず。多くの場合、原料であるカカオのことや加工のプロセスはベールに包まれているのが現状です。カカオ生産量世界1位、2位を占めるコートジボワールやガーナなど、アフリカの生産地では、カカオ農園での児童労働が問題にもなっています。先物取引商品であるカカオは、不公正な貿易を招いている商品のひとつでもあります。そんななか「みんなが大好きなチョコレート、愛のあるカカオから作ろう！」と、生産者と一緒になったカカオ事業が始まりました。

●自分たちのカカオ事業を

カカオの生産者たちは、インドネシア領パプア州(ニューギニア半島の西側)にいます。豊かな自然に恵まれ、様々な動植物が息づく楽園のようなパプア。今でも先住民が多く、その数は約380にも及ぶといわれています。太古から広大な森とともに生きてきた人たちが、狩猟と採取によって生活を営んできました。しかし、19世紀末から始まったオランダの植民地政策、そして1969年のインドネシアによる併合が、その生活を一変させてしまいました。南米原産のカカオもオランダによって持ち込まれ、カカオ産業はインドネシア時代に入っても引き継がれてきています。しかし、ビジネスを掌握するのはジャワ島やスラウェシ島など、インドネシア経済の中央からやってきた人たち。パプアの人びとは、単なる原料供給者です。カカオ産業構造の末端に位置し、売られていくカカオがどうなるか知る術もありません。こうした状況のなか、現状を嘆くだけではなく、自分たちで変えていこうと「パプア人の、パプア人による、パプア人のためのカカオ事業」が始まりました。誰が作ったか分かるチョコレートがほしいという日本の消費者にカカオを届けます。

インドネシア領パプアの地図



●ひとつひとつ学びながら

カカオ豆がチョコレートになるまでには、長い加工プロセスをたどることになりますが、まずは、カカオの種を発酵・乾燥させてカカオ豆にして出荷するところまでを自分たちで開始しました。ところが、これまで自然の中で自由に生きてきたパプア人の多くは「労働をする」ということに慣れていません。集荷スタッフたちは、時間管理をされて働くことに慣れるのが大変だったようです。生産者については、品質のよい豆を出すことを理解するまでに一苦労。よい商品を作っていくということ、初めから一つひとつ学んでいくことの始まりです。2012年から始まったこのパプアでのカカオ事業は、今年で3シーズン目を迎えます。これまでの課題を振り返り、どう改善できるか話し合いがもたれています。どんなカカオが日本に届くか、彼らの奮闘に寄り添っていきたくと思っています。



カカオ豆を発酵箱でかき混ぜる



一つひとつ手作業でカカオの実を収穫する

JIM-NETは福島支援の一環として、(特活)APLA、(株)オルター・トレード・ジャパン、(特活)アークス仏教国際協力ネットワークとともにパプアのカカオを使ったカカオクッキーを作るプロジェクトを企画しました。昨年の秋から、福島県いわき市の福祉作業所で製造を開始しています。このクッキーの売り上げの一部は福島における支援活動費となります。ご協力ください。皆様のお申込を心よりお待ちしております。

第9回チョコ募金が終わって

齊藤信一（JIM-NET チョコ募金担当）

皆さま、第9回チョコ募金も無事終了致しました。今年も16万個のチョコが日本全国に旅立ちました。

どんな方の手に渡ったのかと思い、WEBからのお申込みのコメントを見てみました。

「お友達から聞いて知りました。六花亭のお菓子は大好きだし、缶も可愛いし、とくに募金ではなくても、買いたいと思いました！楽しみにしています。」

「毎日新聞でチョコ募金のことを知りました。今年3月で退職しますので職場のみなさんに感謝の気持ちを込めてお配りしようかと思っています。」

「私の母はいつもこう言います、「内戦等々で苦しんでいる国の子供たちの目はほんとに綺麗ね」と。きつと心に一点の曇りもないからなんでしょうね。」

「毎年、夫と子どもたちのバレンタインのチョコレートにしています。お気に入りの絵柄を取り、最後は缶を玄関に飾ります。コレクションが増えていき、嬉しい限りです。」

「今年も図書館に展示させて頂きます。」と東京都世田谷区にある学校からもお申込みがありました。

又、亡き母の遺言を守って今年も参加して頂いた方。このチョコ募金は沢山の方のご支援で成り立っていると実感致しました。

1月中旬、事務所に1本の電話が入りました。

「先日申し込んだチョコをキャンセルしたい」の趣旨。理由をお聞きすると「私、**生協の会員で生協さんに申し込みたいので」。良かったです。このチョコ募金が否定されたのかと思いましたが、「了解致しました」と喜んでキャンセル処理を致しました。今年は2つの生協さんが協力してくださいました。

このチョコを店頭置いてくださった協力店様も沢山ありました。1月のある金曜日、協力店様から追加のご注文がありました。近くの高校の生徒さんが多数募金に見えて、チョコの在庫が無くなったそうです。お店の方がその高校生にお聞きしたところ「生徒さんの一人が、日本テレビ「ニュース・エブリィ」でチョコ募金紹介のコーナーをご覧になり、クラスの友達を誘って来られた」とのことでした。有り難い事です。テレビ以外にもラジオ・新聞・地方のミニコミ誌なども紹介して頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。有難うございました。

今回のチョコ募金は、「寿」で始まって「寿」で終わりました。前号でも紹介させていただきましたが、11月にお送りした福井県の方。式の最後に司会者様からチョコ募金を紹介して頂き、お配りしたそうです。

2組目は東京都港区にお住まいの方。3組目は事務局長佐藤の出身地、奈良県の方。この方も幸せのおすわけで出席者様にお配りしたそうです。その幸せがイラクの子ども・福島の子供・シリアからの難民の妊産婦さんと赤ちゃんにも届きます。4組目は3.11で被害を被られた宮城県の方。5組目はびっくりです。

JIM-NET代表である鎌田實の住まいの隣の市、なんと長野県諏訪市にお住まいの方。このチョコは絆がぐるぐる回っていると感じました。

福井のお二人は、新婦さんがおめでたそうで、新郎のお母様からは「おかげさまで初孫が出来ました」と嬉しいお電話を頂きました。

このチョコはイラクの小児がんの子どもたち、シリアからの難民の妊産婦さんと赤ちゃん、福島の子供たちを守るだけでなく、募金して頂いた方も幸せにするパワーを持ったチョコだと感じました。

これから結婚をご予定されている方、チョコ募金の季節でしたら「このチョコを出席の皆様にお配りする」ことを検討して頂ければ幸いです。

最後になりましたが「チョコ募金 ありがとうございます」



鎌田代表のつぶやき。。。

～チョコ募金にご協力下さったたくさんの方々から感謝します～

バレンタインのチョコ募金が無事16万個分終了しました。3月のホワイトデーまで残るかな、と心配をした時期もありましたが、5つもの結婚式などの引き出物にご要望があったり、社会貢献を目指している企業が大量にお求めくださったり、後半はチョコ募金開始12月当初の勢いを取り戻し無事終了しました。ギャラリー日比谷様には毎年無料で画廊を貸していただき、JIM-NETは写真展や絵画展をおこなっておりますが、そこでもたくさんの方のチョコ募金へのご協力をいただきました。2月19日、パレスチナの3人の娘さんを殺されても、『それでも、私は憎まない』（亜紀書房）という本の出版を記念して著者のイゼルディン先生を招き、「憎まない」生き方、という講演会を開催しました。JVCやピースボートとも協力して企画したのですが、国連パレスチナ難民救済事業機構の清田先生にもシンポジウムに加わっていただき、また開演前には永六輔さんやNHKの元アナウンサー村上信夫さん、TBSラジオで永さんのアシスタントをしている外山恵理さんなどにも、それぞれ「憎まない」生き方について自分の生活の中での話をしていただき、とてもおもしろい講演会になりま

した。そこでも残りわずかのチョコ募金は飛ぶようになくなりました。10年前、JIM-NETが初めてイラクに入ろうとしたとき、アラビア語と日本語の通訳をしてくれたシーファさんは、今ヨルダン大使夫人として東京にいらっしゃり、アラブ大使夫人の会などを開いて寄付をしてくれています。今年もオマーン大使館で鎌田のチャリティー講演会を開いてくださり、ここでも最後わずかに残ったチョコレートは飛ぶようになくなりました。

不思議なもので、なくなると、もっとほしい、もっとほしいとたくさんの人たちから声がかかります。来年はなくなる前にお早めに注文いただけると助かります。たくさんの方々にご協力していただきましたこと、心から感謝します。

今、JIM-NETはイラクの病気の子どものための支援をするとともに、シリア難民の妊婦さんと新生児を支えるシステムを構築するためスタッフは繰り返しイラクやヨルダンに入っております。さらに福島の子どものための放射能の見える化がなんとか進むように活動中であります。JIM-NETのご支援を今後ともよろしくお願い致します。

JIM-NET新スタッフよりご挨拶



はじめまして、東京事務所で新しく活動させていただくことになった大牧です。JIM-NETの活動は以前中東を旅行した際、偶然スタッフの方にお目にかかったときにお話を伺い知りました。

1月からはチョコ募金の受付業務に携わり、2月にはギャラリー日比谷でのイベントにも従事して、10年をかけて築かれた広く厚みのある善意と支援を強く実感しました。

中東地域は日本との経済的な結びつきが強いにもかかわらず、近代まで天文学、医学を含む科学の分野で欧州を凌駕していたことを私は最近まで知りませんでした。JIM-NETの活動であるイラクの人々、原発事故で脅かされた人々の命を守ることは、かけがえのない郷土と文化を守ることに明るい希望を見出すと信じています。

これからも、JIM-NETの一員として支援者の皆様と現場の間でより正確かつ視野の広い相互のコミュニケーションがとれるよう努力したいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

カカオクッキーのご紹介

Cacao Cookie Wa - 笑顔がつなく、明日がつなく

Cacao Cookie Waは、インドネシア・パプア州の先住民が丁寧に育てたカカオを原料に、福島にある障がいを持った方の福祉施設で、ひとつひとつ心を込めて作られています。このクッキーの売り上げの一部は、自然エネルギーの普及に生かす予定です。

Cacao Cookie Waの‘Wa’は、調和・対話・平和などのWa。カカオの香り豊かなこのクッキーで、ぜひ皆さまのWaを感じてください。

1袋6枚入り400円
(送料・消費税別)

お問い合わせ・お求め先

APLA SHOP

TEL: 03-5273-8160

HP: <http://www.aplashop.jp/>



【編集後記】
感動の冬季オリンピックも無事終了。暖かな陽射しの春が待たれます。

JIM-NET便り 2014年 3月号

発行: 特定非営利活動法人

日本イラク医療支援ネットワーク

発行日: 2014年3月20日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303

info:jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746